

〈原 著〉

武士道思想における死生観に関する一考察

—中世期の武士像を中心に—

高瀬 武志*

A consideration about the view of life and death in Bushido thought
—Focusing on image of a medieval-times term samurai—

Takeshi TAKASE*

Abstract

The aim of this thesis is to understand the samurai's view of life and death in each period and to show how it has changed in the course of time in the ideological framework of Bushido theory and chivalry.

In this paper, the concept of death is investigated based on Bushido books which clearly express how samurai who lived in the targeted eras considered life and death.

After all the descriptions related to death were picked out from each document, they were closely compared and examined. As a result, it was found that among samurai that lived in medieval times, considerable differences could be seen about the concepts or understanding of life and death depending on the time and positions.

The characteristics of samurai in medieval time are that they thought more of death than life and that they were less rejective of death. Also, aristocratic samurai associated death with grace such as stillness or elegance. On the other hand, other samurai associated death with strength like bravery and courage. These seem to be the main differences about the concept of death among medieval age samurai.

Key words: Bushido Death Thought Samurai

1. はじめに

本研究は、わが国の伝統的運動文化の一つである剣道に着目する。剣道の前身は剣術であり、敵を斬ることをつきつめていく殺人技術の習得と実践である。これを生業としたのが武士であった。このような戦闘或は殺人を生業とする武士が、日本の歴史の表舞台にたち、世界的にも稀にみる長期間にわたって支配してきたのもまた事実である。しかし、このような武士が、ただ人を殺めることを専門とする殺

人集団であったかというところではない。武士には武士社会特有の理念や規範が存在した。これを広義に解釈すると「武士道」といえよう。この武士社会で発達した「武士道」の思想は、現在、武道特に剣道が有する文化的独自性として脈々と受け継がれている。また、「武士道」という思想は、武道に直接携わる者に限らず、我々日本人が尊重すべき日本人のアイデンティティーの一面であると考えられる。これを念頭におきつつ本研究を進めていくこととする。

まず、表題にもある「武士道」とは、辞書的に解釈すると『広辞苑』に「日本の武士階層に発達した道徳。鎌倉時代から『弓矢の道』としてあり、江戸

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sports Science, Juntendo
University

時代に儒教とくに朱子学に裏づけられて確立，封建体制の精神的な柱となり，明治以降，国民道徳の中心とされた。主君への絶対的な忠誠のほか，信義・尚武・名誉などを重んずる』とある。また、『日本国語大辞典』には「中世以降，日本の武士階級の間で発達した独特の倫理。禅宗や儒教に裏づけられて江戸時代に大成した。『葉隠』のように，善悪・正不正を問わないで死を賭して主君に奉公する考え方と，山鹿素行のように，主君・家来ともに儒教倫理に基礎をおいて振舞う土道の考え方とに分かれるが，狭義には前者をさすことがある。忠孝・尚武・信義・節操・廉恥・礼儀などを重んじる』とある。

一般的に武士の間で発達した思想を「武士道」とよぶようになったのは，江戸時代の終わりから明治時代に入ってからであり，それまでは「武士道」という名称よりも「もののふの道」「弓矢執る身の習」「兵の道」「坂東武者の習」といった名称が一般的であり，時代や武士の立場によってその名称は異なる。また，「武士道」の原点的位置は，平安期における古代以来の宮廷貴族が中心であった世から武士が台頭し，時代の表舞台に出てきた源平二氏の時代まで遡ることがあり，この時代を「武士道」の原点的位置にあるとあって大過ないであろうと考えられる。

次に，武士は人生において「生」よりも「死」を強く意識し，人生の終着点である「死」をどう飾るかといった，死に方や死に様を重要視した。これは当時の武士を表している軍記物語などに顕著に窺える。そのうちの一例を述べると，『平家物語』に登場する木曾義仲と今井兼平という二人の武士が挙げられる。木曾義仲は征夷大将軍に任命される程の武将である。しかし，最後は身分の低い郎等に討ち取られてしまうという不本意な死に方をし，死後の名誉はおろか賞賛すら得られていない。一方の今井兼平は木曾義仲に仕える武士であり，義仲より身分は低い，主君を逃がす為には戦場に一人残り孤軍奮闘し，主君の死を知った時は潔く自害するその姿に「日本一の剛の者」という賞賛と死後の名誉を得ている。つまり，中世以前の戦闘を生業として

いた武士は普段どのような高い身分であったとしても，「死」を目前にし，いよいよ最後という時に不覚な死に方をしてしまうと末代の恥となってしまう。ここに武士にとっての「生」の価値は「死」の飾り方，或は死に様に求めることができると考えられる。

よって本研究では，武士の死生観を「死」の観念の捉え方を中心にアプローチしていくものとする。

2. 先行研究の検討と問題の所在

本研究における主な先行研究として，相良亨『武士の思想』，古川哲史『日本的求道心』，小澤富夫『歴史としての武士道』が挙げられる。各々の先行研究で武士道思想について言及している方向性やアプローチの仕方等をふまえて検討し，本研究における問題の所在を明らかとしたい。

相良氏は，武士道思想には大別すると「武士道論」と「土道論」の二つの思想的枠組みに分類できると指摘している。また，「武士道論」にみられる死生観については，死を覚悟し，より積極的かつ迅速に死を受け入れようとする，至って戦闘者的であると指摘しており，一方の「土道論」にみられる死生観については，死を覚悟することにおいては同様であるが，死の受け入れ方は消極的であり至って慎重であろうとする為政者的であると指摘している。

古川氏は，先に述べた相良氏と同様に「武士道論」と「土道論」という思想的枠組みに大別したうえで，武士道思想の変遷を武士像・武士の処世観という観点からアプローチし，特に「武士道論」の枠組みにおける武士の思想の変遷を武士の思想をあらわす名称に注目しながら言及している。

小澤氏は，先に述べた相良・古川両氏とは武士道思想に対するアプローチの仕方が異なる。小澤氏は『「武士道」という『道』には，武士がその時代を踏み続け，武士として『なさねばならぬ事』と『なしてはならぬ事』，『武士の矜持』が存在した。人為的な道であるので，時代によってその道は異なる』ⁱⁱⁱと指摘しているように，「武士道」という思想を武士の踏み行うべき道として捉えており，それは時代

やその武士のおかれた立場・状況によって異なるものとして、「武士道論」や「土道論」といった思想的枠組みで捉えるのではなく、史的変遷という観点から武士像・処世観に着目してアプローチしている。

これらの先行研究から、武士道思想を把握するうえで、史的変遷と思想的枠組みによる変遷の二つの観点からアプローチできることがわかる。ここまでが先行研究で明らかとなっている部分である。このように武士における実像や処世観に着目して変遷がみられるということは、武士の思想や生活にとって非常に重要な死生観においても史的変遷や思想的枠組みによる変遷はみられるはずである。武士に限らず、人はその生活様式の変化によって「死」や「生」に対する捉え方は大きく変化するものであり、それは当時の武士と現代人とを比較したとしてもそう大差ないであろうと考えられる。特に、武士における死生観のうち「死」の観念の捉え方の変遷は顕著であろうと考えられる。しかし、管見する限りでは武士の死生観を時代別に捉え、「武士道論」や「土道論」といった思想的枠組みに着目して、その変遷を明らかにした研究は見当たらない。ここに本研究における問題の所在がある。

本研究では、研究対象とする武士の時代を中世期に絞り、この時代における武士の思想や死生観の変遷を思想的枠組みにも着目しながらアプローチしていく。

また、本研究において扱う文献史料は以下の通りである。

〈文献史料〉

『今昔物語集』(四)日本古典文学大系25, 岩波書店, 1962.

『保元物語 平治物語』日本古典文学大系31, 岩波書店, 1961.

『平家物語』(上・下)日本古典文学大系32, 岩波書店, 1959.

『吾妻鏡』(一・二・三・四・五)岩波書店, 1939.

『太平記』(一・二・三)日本古典文学大系35, 岩波書店, 1961.

3. 研究方法及び文献史料について

本研究における研究対象は武士道思想における死生観である。研究方法としては、武士の思想や死生観が読み取れる代表的文献を史料として扱い、その文献にみられる記述を抜き出し比較・考察をおこなう、いわゆる文献学的手法を用いる。

本研究で取り扱う文献史料の史料的価値を「史実に対する正確さ」よりも、その文献にみられる武士像や思想といった「理想的武士像」或は「武士的概念」に重きを置いて史料の選定をおこなうこととする。

また、先述した文献史料の概略は以下の通りである。

『今昔物語』は、全三十一巻から成る我が国最大の説話集である。成立・編者共に不明であるが、成立年次は平安末期であると考えられている。全三十一巻は、天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)に分類され、それぞれ仏教説話の後に世俗説話が配列されるという構成である。本論では巻二十五に収録されている「本朝付世俗」の武士に関する説話を中心に考察をすすめる。

『保元物語』は、保元の乱の様相を収録した史実に即した軍記物語である。作者は不明であるが、十三世紀前半で、『平家物語』以前には成立していたと考えられている。三巻(上・中・下)から成り、上巻では崇徳上皇と後白河天皇、関白藤原忠通と左大臣藤原頼長の対立を軸に内乱に至るまでの経緯が述べられている。中巻では、上皇側の武士である源為朝を中心に合戦の様相が描かれている。下巻では、合戦後の源氏一門の処刑が描かれている。

『平治物語』は、平治の乱の様相を収録した軍記物語である。保元の乱における源為朝と平清盛の待遇の格差によって、クーデターが起こり源平の合戦を経て、源氏の敗北で終結する。『保元物語』とは同一人物による編集で姉妹編であるとされているが、異説もある。しかし、『保元物語』とは極めて位相の類似した史料であることには変わりない。

時代背景としては、武士や荘園領主としての貴族

や寺社が形成され、さらに農民や百姓といった層の人々にも自立的な性格が明確になってくる時代である^{vi}。

武士の起源については諸説あり、福島氏が指摘しているように「律令制の下では、奈良時代は弾正台・衛府・京職、平安時代初期に検非違使が加わり、京内の警察活動を行い、地方では国司・郡司が治安の維持にあたった。ところが、平安中期以降、律令制が動揺し、国家による治安維持活動が弛緩してきたため、盗賊や群盗がおこった。そこで、地方豪族や有力農民は自ら開発した所領を守るために武装し、そこから武士が発生した^{vii}」というのがこれまでの通説であった。これは「在地領主」=「武士」という発生形態を起源とする説である。しかし、近年では以上に述べたような武士の起源の捉え方は見直され「職能的武士論」という新しい学説が通説となっている。これは高橋氏の研究^{viii}に詳しい。つまり、初期の武士は五衛府などを中心とする武官や「瀧口」とよばれる宮中の警護を任されていたが、やがて内裏の警護をした近衛府を中心とする武官に武器や武具が継承され、その中で、「惣領」を中心に「家子」とよばれる一族の集団やさらに下に「家人・郎等」といった集団が集まるようになる。こうした集団が武士団となる。この武士団が有力な貴族らの下に集まると大武士団へと規模が拡大する。このような大武士団の棟梁で有名なのが、桓武天皇の子孫の流れを汲む桓武平氏や清和天皇の子孫の流れを汲む清和源氏である。後にこの二氏が武士の時代を築く。以上に述べたような説が新しい武士の起源として捉え直されている。

武士が誕生し、貴族らは武士を宮中の警護や地方の治安維持・反乱の鎮圧のために仕えさせる。こうして武士は徐々に力と経験を蓄えると同時に、貴族社会へと進出しはじめる。中でも特に勢力を拡大したのが源氏と平氏であった。朝廷内の権力抗争に乗じて、保元の乱(1156)と平治の乱(1159)を経て武士が時代の表舞台へと躍進する。これは以下に記す『愚管抄』にみられる著名な一節からも理解できる。

「保元元年七月二日鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後、ムサノ世ニナリニケルナリ^{ix}」(傍点筆者)

以上に述べた記述のみをもって中世=武士の世とは一概に定義づけることはできないが、武士が世の表舞台へと進出し、貴族階層と肩を並べるだけの勢力を身に付けたことは容易に理解できる。

本稿では、以上に述べた事柄を当時の武士の時代背景として把握し、そのうえで論をすすめる。

『平家物語』は、平安時代末期に起こった源平合戦を中心に、当時最大武士集団であった平家一門の栄華とその後の没落を描いた我が国を代表する文学作品であり、軍記物の名著である。最古のものの成立年代は鎌倉初期といわれている。盲目の琵琶法師の弾き語りにより、全国に語り継がれた。『平家物語』は異本が多く存在するが、現在では「覚一本系」とよばれる十二巻編成に「灌頂巻」が加わったものが普及している。

覚一本系『平家物語』においては前半部分で、平清盛を中心に描かれており、清盛の死と同時に平家一門の没落の兆候を見せながら物語は大きく転換していく。後半部分においては、源義仲や義経を中心に、平家・源義仲・源頼朝・義経らのそれぞれの思惑と死が描かれている。最期は壇ノ浦の合戦による平家滅亡と最期の生き残りである六代の処刑をもって物語は終焉する。「灌頂巻」では建礼門院徳子の物語を描き、平家一門の菩提を弔う形式をもって終結する。注目すべきは、物語全体を通して貫かれている世界観は「諸行無常」「盛者必衰」という観念であり、そこには善悪理非といった観念を超越して描かれている。

『吾妻鏡』は、鎌倉後期成立の史書であり、十二世紀末の頼朝挙兵から十三世紀中頃の六代将軍宗尊親王の帰京までの八十七年間を取り扱っている。諸本により巻数などに違いみられるが、大別すると五十二巻・五十一冊の北条本・島津本、四十七巻・四十七冊の吉川本の二系統に分類される。日記体を用い、編年風に和様漢文体で記されている。『吾妻鏡』

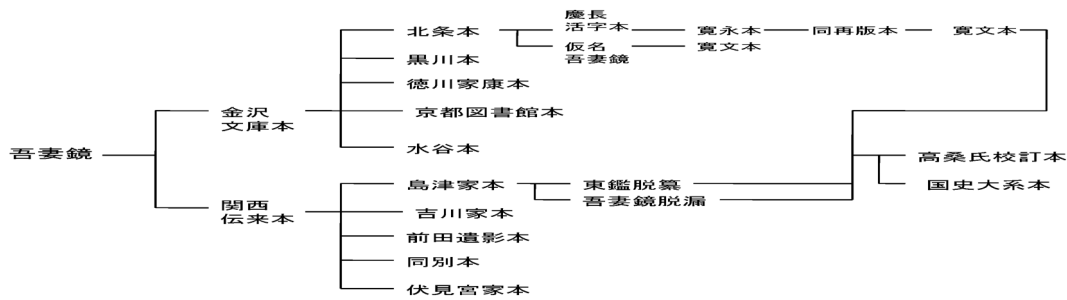


図1 『吾妻鏡』系統図(八代国治による)

は編纂にさいして、数多くの史料が参考にされている。先学^xによると、そのタイプは大きく分けて三つに分類される。第一に、九条兼実著『玉葉』や藤原定家著『名月記』などに代表される公家側の日記である。第二に、『平家物語』『源平盛衰記』『六代勝事記』『海道記』などといった軍記物語である。第三に、幕府に伝存した古文書類である。

伝本関係のテキストとしては、八代氏の研究に詳しい。氏の『吾妻鏡の研究』^{xi}を踏まえて、その伝本関係の種類と大観を以下の図1に記す。(図1)

史実としての時代背景は、武士の台頭とともに、庶民の生活に注目が集まり平安中期にみられる国風文化が都から全国に広がっていく時期である。文学においても、あいつぐ戦乱を取り上げる軍記物語や歴史の中心が、貴族から武士へと移り変わっていくその様相を描いた歴史物語などの充実にてとれる。思想的には、末法思想が盛んになり、戦乱の相次ぐ現世希望がもてず、来世における極楽往生を願い、競って寺社や御堂が建立された時代である。

そして、独裁を強める平家一門に対する貴族や武士らの不満が高まり、後白河法皇の院宣をうけた源氏が平家打倒の兵を挙げる。これを期に全国を巻き込む源平争乱の時代へと移行していく。

『太平記』は『平家物語』とならぶ日本古典文学を代表する名著である。全四十巻からなり、応安(1368~1375)から永和(1375~1379)の頃までに成った和漢混淆文で描かれた書物である。また、南北朝期の史実を中心に物語として著された軍記物語であるが作者は未だ説明されておらず、小島法師説が最も有力な説であるとされている。『太平記』は、

全体の構成を大別して三部構成とする見方が一般的である。

第一部は、巻一から巻十二までをその範囲とし、後醍醐天皇の即位から鎌倉幕府の滅亡を描く。第二部は、巻十三から巻二十一までをその範囲とし、建武の新政の失敗と南北朝の分裂を通して、後醍醐天皇の崩御までが描かれている。第三部は、巻二十二から巻四十までをその範囲とし、南朝方の怨霊によって室町幕府内部の混乱が巻き起こる様を描いている^{xii}。

また、『太平記』は伝本が数多く存在し大別すると、古態本・古態本改訂本・流布本の三種類に分けられる。古態本とは、全四十巻のうち、巻二十二を欠本とする諸本であり、神田本・西源院本・玄玖本(前田家本)・金勝院本などがこれにあたる。改訂本とは、古態本の巻二十三・二十四の内容を編纂し、巻二十二へ作為補訂した諸本であり、天正本・梵舜本などがこれにあたる。流布本とは、慶長七年以降に刊行された刊本であり、古態本を中心に改訂本を対校して成立したものであるため、最も『太平記』の集大成に近いものであるという評価を受けている^{xiii}。さらに、『平家物語』が琵琶法師の弾き語りによって伝播したように、『太平記』も「太平記講釈」或いは「太平記読み」として室町時代の物語僧によって講釈されることにより、広く伝播したとされている。

『太平記』の有する思想的特徴を考察するとき、『平家物語』と比較することによって顕著に窺い知ることができる。『平家物語』の巻第一の冒頭、「祇園精舎」の一部を以下に記す。

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。—以下略—^{xiv}」

以上に記した記述からも理解できるように、『平家物語』は仏教的無常観に導かれて語りだされているのに対し、『太平記』では著しく異なった観念がみとれる。『太平記』の「序」を以下に記す。

「蒙竊採古今之變化_一、察安危之來由_一、覆而無_レ外天之徳也。明君體_レ之保_一國家_一。載而無_レ棄地之道也。良臣則_レ之守_一社稷_一。若夫其徳歛則雖_レ有_レ位不_レ持。所謂夏桀走_一南巢_一、殷紂敗_一牧野_一。其道違則雖_レ有_レ威不_レ久。會聽趙高刑_一咸陽_一、祿山亡_一鳳翔_一。是以前聖慎而得_レ垂_一法於將來_一也。後昆顧而不_レ取_一誠於既往_一乎^{xv}」

永積氏は、以上に記した『太平記』の原文の要約と共に次のように指摘している。

『太平記』の『序』は、要するに、古今の歴史を鏡として将来をトせよ、という思想を主張しているのであって、天は下界のあらゆるものを覆う。君主も天に学んで、人民すべてを覆い包んでやらなければならない。もし君主が、こうした天の道に背けば、その地位は保たれず必ずや滅びるであろう。また大地はあらゆるものを、えらぶことなくその上に載せる。臣下もまた、地の道にならって、すべての人民を守ってやらなければならない、その威勢を保てなくなるものだと説いて、それぞれ中国史上に著名な暴君・悪王、あるいは叛臣・逆徒の名を列ね、こうした歴史的事実の語ることを鏡として、国の政治は行われなければならない、と主張しているのである。この『序』を認めるかぎり、『太平記』の作者は、この作品を書くにあたって、こうし

た思想に導かれて構想を進めたと考えてさしつかえあるまい^{xvi}」

以上の『太平記』の「序」の記述や、永積氏の指摘からも理解できるように『太平記』の「序」は全て漢文体で記されており、その内容も中国の思想、いわゆる「宋学」における天道思想の影響が色濃く見受けられる^{xvii}。また、永積氏も同様に指摘しているが、文学性という観点では、『平家物語』が有するイメージは、優美かつ繊細な美意識と同時に「もののあはれ」といった情感を抱かせる。一方の『太平記』は東国武士が躍動する合戦が中心であり、そのイメージは勇猛・剛毅・豪放といった荒々しいものである。しかし、従来の軍記物語とは異なるのは「宋学」の影響による「義」や「理」といった観念が窺える^{xviii}。

『太平記』は、南北朝の動乱を描いた史実的要素を含んだ軍記物語であることはすでに述べた。しかし、ある程度の潤色がなされていることもまた事実である。そうした事実を指摘して、久米邦武氏は「太平記は史学に益なし」と論じ、批判的な見方もされてきたが、近年では『太平記』が比較的史実に忠実であるとする論が一般的である^{xix}。

南北朝時代とは、鎌倉時代末にあたる1246年頃(寛元四年)から1392年頃(元中九年/明德三年)を指し、鎌倉幕府の崩壊を期に天皇を中心とする政治が始まり、貴族中心の政策に不満を抱いた武士が結束し、足利尊氏が武家政治の再興を唱えて動乱を起こす。そのため、後醍醐天皇が吉野に逃れたため、朝廷が南朝と北朝に分裂する。この朝廷の分裂を期に、五十余年にもわたる争乱が起きる。

以上に述べた事柄を当時の武士の時代背景として踏まえたうえで論をすすめる。

4. 「兵ノ道」の死生観—『今昔物語』『保元物語』『平治物語』を中心に—

本章では、平安時代初期にみられる「兵ノ道」という至って原始的な戦闘者の武士の思想の死生観について触れる。この時期の武士を取り巻く状況は

「保元の乱」と「平治の乱」を通して、平家が源氏を抑えて権力を掌握しようとする時代であり、武士の思想としては平家がまだ貴族化していない最も原始的な武士の思想であるといえる。この時代の武士の死生観を理解するうえで、『今昔物語』『保元物語』『平治物語』の三つの史料を挙げることができる。これらの史料から読み取れる「死」に関する記述を抽出すると以下の表1のようになる。(表1)中でも以下に記した記述に注目したい。

表1にみられる記述からも理解できるように「死」を覚悟するうえで、自身の死生の問題を無常であり、生滅・変化して常住ではなく、はかないものであると捉えていることが理解できる。また、「命を惜しまずに戦うこと」や「命よりも名を求めて戦う」ことが記述としてみられることから、死を恐れない勇猛な武士像が理想として窺える。また高橋氏が「中世の他の道と同様、『兵ノ道』にことさら精神的・倫理的なものを求めようとするのは適当ではない。『兵ノ道』は『心太く、手聞キ、強力ニシテ、思量ノ有ル』、つまり、勇敢・敏捷で、腕力と判断力にすぐれた、バランス良い戦闘能力の保持に重点を置いており、それであってはじめて中世的な『道』たり得るのである。この点『兵ノ道』は、近世幕藩体制下の観念的・処世術的『武士道』と大きく異なっており、戦士の名に即した実用的なものだった^{xxx}と指摘しているように、「兵ノ道」にみられる死生観は、至って原始的な戦闘者としての性格が色濃くみられるという特徴が挙げられる。

5. 「貴族的武士道」と「東国武士道」の死生観—『平家物語』『吾妻鏡』を中心に—

本章では、平安時代中期以降にみられる貴族的武士道(平家)と東国武士道(源氏・東国武士)という二つの武士の思想の死生観について触れる。この時期の武士の状況は栄華を極めた平家が没落し、源氏を棟梁とする東国の武士が台頭してきた時代である。よって、ここが一つの武士道思想の変革期と捉えることができる。また、この時代の武士道思想について小澤氏は「平氏の『貴族的武士道』と源氏の

『坂東武士道』、『京の雅』と『東国の鄙』という異なった二つの武士の型があることに気づく^{xxi}と指摘している。なお、小澤氏は「坂東武士道」と表現しているが、本研究では源氏を中心とする武士の思想を広義に解釈し、東国武士道として論を展開することとする。

この時代の武士の死生観を理解するうえで、『平家物語』『吾妻鏡』の二つの史料を挙げることができる。これらの史料から読み取れる「死」に関する記述を抽出すると以下の表2のようになる。(表2)

表2にみられる記述を踏まえて考察すると、平家に代表される貴族的武士と源氏に代表される東国武士とでは、「死」の捉え方、死に様に違いがみられる。

貴族的武士の死の捉え方、死に様として平知盛の最期が例として挙げられる。源平の合戦において、平家の運命が尽きたと感じた知盛は、見苦しいものは海に投げ入れ、最後は平家の没落を見届けてから静かに自身の死を受け入れて入水する。ここに「もののあわれ」といった情感を求めることができる。また、貴族的武士は「死」までも華麗で美しくあろうとする姿勢や「死」を静かに受け入れようとする特徴がみられる。

一方の東国武士にみられる「死」の捉え方、死に様は今井四郎の最期が例として挙げられる。それは以下に記す文章からも理解できる。

「今井四郎いくさしけるが、是をきゝ、『いまはたれをかばはんとてかいくさをばすべき。是を見給へ、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本』とて、太刀のさきを口に含み、馬よりさかさまにとび落、つらぬかてぞうせにける。^{xxii}」

以上に記した引用文からも理解できるように、東国武士は自身の最期を名誉あるものにするために、ただ自害するだけではなく、他の者には真似できないような可能な限り勇ましい死に方、死に様を遂げようとする。

表1

史料名	「死」に関する記述	巻数
今昔物語	爰ニ貞盛并ニ押領使藤原秀郷等此レヲ傳ヘ聞テ彼等、「公家ノ耻ヲ助ケムト思フ、身命ヲ弃テ合戦ト思フ」ト相語テ、秀郷等多ノ兵ヲ具シテ行向ニ、新皇大キニ驚テ兵引具シテ向フ。	卷二十五
今昔物語	身命ヲ不惜マ合戦フ。新皇、駿馬ヲ疾テ自ラ合戦フ時ニ、現ニ天罰有テ、馬モ不走手モ不思ヘシテ、遂ニ箭ニ當テ野フ中ニシテ死ヌ。	卷二十五
今昔物語	貞盛・秀郷等喜ビ乍ラ、猛キ兵ヲ以テ其ノ頸ヲ切ツ。即チ下野ノ国ヨリ解文ヲ副テ其頸ヲ上ス。新皇、名ヲ失ヒ命ヲ滅ス事、彼ノ興世ノ王等ガ謀ノ致ス所也。	卷二十五
今昔物語	餘五陸ニ上タレバ、郎等共各家二人ヲ遣テ、或ハ衣ヲ持来リ、或ハ食物ヲ持来リ、或ハ弓箭・兵杖ヲ持来リ、或ハ馬・鞍ヲ持来レバ、餘五、皆衣ヲ着、物ヲ食テ後ニ云ク、「我レ今夜被圧ツル、初メニ逃テ山ニ入テ命ヲ可存シト云ドモ、『逃スト云名ヲ世ニ不留』ト思テ、此ル目ヲ見ル也。	卷二十五
今昔物語	餘五、此レヲ聞テ云ク、「尊達ノ云所最モ可然シ。但シ我ガ思フ様ニ、『今夜ヒ家ノ内ニシテ焼キ被殺ナマシカバ、只今マデ命存セムカ。構テ此ク遁レタレバ、生タルニハ非ズ。一日ニテモ尊達ニ目ヲ見セムズレバ、曲タル耻也。然レバ我レ露許命ヲ不惜マ。尊達ハ後ニ軍ヲ儲テ可戦也、我ニ於テハ、只一人彼レガ家ニ向テ、焼殺スト思ハムニ、此クモ有ケリト見ヘテ、一度ノ箭ヲ射懸テ死』ト思也。乃至子孫マデ此レハ極テ耻ニハ非ズヤ。後ニ軍ヲ發シテ罰タラムハ、極テ弊カリナム。命惜カラム尊達不可来、我レ一人ハ行ナムレト云手、只出立ニ出デ立ツ。	卷二十五
保元物語	桃顔いまだ春の霞におとろえさせましまさゝれども、蘭質たちまちに秋の霧にをかされて、あしたの露と消えさせ給ぬ。御年わづか十七歳、おもひあへざりし御事也。人間は老少不定といひながら、禁中みなくれにけり。	上巻
保元物語	ほとけも人も寿命の長短不同なるにや、釈迦如来よりはるかのさき、照日光如来は御壽命十年任無住如来はわづかに一日なり。	上巻
保元物語	人間は是生死無常、芭蕉泡沫のさかひなれば、初ておどろくべきにあらねども一天かくれて月日のひかりをうしなひ、万人うれへにしづみ父母の喪にあへるがごとし。	上巻
保元物語	源氏の家にむまれて、二人のしうをばもつまじきものを。御邊のけうくんにはよもよらし。高祖父大和守たりしより奥郡にきよちうしていまだ武略の名をおとさず。かけよや、わかものども。いのちなおしみそ、名をおしめ。まんなかをかけやぶつてとおせやゝ。	上巻
保元物語	義朝畏て申けるは「家に傳る事候。合戦の庭に出て、死は案の内の事、生は存の外の事也。然に懸命におるては、故院の御遺命並に宣旨の趣にかはり候。又骸を戰場にさらさん事只今也。生て再び歸参べき事にこそ後栄をも朋候はめ、天運に任せんずるより外は頼すくなき命也。後日に勅許有べくは只今宣旨を下さるべしと覚候。其故は、年来の所望達ぬと存るならば、少いさむ心も候べし。所望を達せずして二となき命をすてん事且は妄念ともなり、且は無念にも候べし。	上巻
保元物語	さては善悪為義まづ命を捨てさう有べきなり。」とて、罷立。誠たのもしき聞えける。	中巻
保元物語	八郎殿の矢に中て死なんこと一定なり。但弓矢とる者のかゝる事にあふな所領の幸也。生たりとも死たりとも、軍功は定の物ぞ。	中巻
保元物語	殿のうたれさせ給はゞ、それがし生て何のせんか候べき。殿の死し給はむ事は、某先死での左右ぞ。	中巻
保元物語	御中差一つ給て死候はゞ、後世の思出にもし、生たらん今生の面目にも仕候はん。	中巻
保元物語	武しては今生の面目をほどこし、其忠世々にたえず、後代に名をとゞめ、其功子孫に及とかや。臆しぬれば、恩禄かくるのみならず、のみならず、生ては恥辱をいだき、死てはそしりをのこすといへり。能々思慮をめぐらすべきは兵のみちなるべし。	中巻
保元物語	泣とも誰かは助べき。必死の習あむなれば、たゞ其時と思へし。おとなに成て死んも、只今切れんも、命を惜む習、唯同時にてぞあらんずらむ。いきても今は何のせんかは有べき。	下巻
保元物語	心に任せ世間の習なれば、一日片時もつれなく命ながらへて、つもらん罪こそ怖しけれ。されば水の底へも入なばやと思ふぞとよ。此身の命を惜ず、只無上道を願べしとぞ佛も説せ給ふなれ。	下巻
平治物語	血を含み疵を吮て戦士を撫しかば、心は恩の為に仕はれ、命は義に依て軽かりけり。身をころさむ事を痛まず死をいたさむ事をのみおもひけるとぞ承る。	上巻
平治物語	今は露の命さへのがれがたし。昨日のたのしみ今日の悲み、諸行無常は只目の前に顯れたり。	上巻
平治物語	平家馬の気をやすめてかけければ、源氏は大内へ引返し馬の気をうがせてかくれば、平家大宮へ引退き、兵どもたがひに命をおしまず、入かへゝ武藝の道をぞほどこしける。	中巻

表2

史料名	「死」に関する記述	巻数
平家物語	忠盛是を傳聞て、「われ右筆の身にあらず、武勇の家にむまれて、今不慮の恥にあはむ事、家の為身の為心うかるべし。せむずる所、身を全して君に仕といふ本文あり」とて、兼て用意をいたす。	巻一
平家物語	此世はかりのやどりなり。	巻一
平家物語	御心のたけさ、理のつよさ、さしもゆゝしき人にてましゝけれども、まめやかに事のきうになりしかば、御命を惜ませ給ける也。誠に惜かるべし。四十にだにもみたせ給はで、大殿に先立まいらせ給ふこそ悲しけれ。必しも父を先立べしと云事はなけれども、生死のをきてにしたがふならひ、萬徳圓滿の世尊、十地究竟の大士たちも、力及び給はぬ事ども也。	巻一
平家物語	遠き御まもりとならせおはしまして候事をば、嶋にてかすかに傳へ承りしか共、心にまかせぬうき身なれば、いそぎまいる事も候はず。成經彼嶋へながされて、露の命消やらずして、二とせををくて經めしかへさるゝうれしさは、さる事にて候へ共、この世にわたらせ給ふを見まいらせて候ばこそ、命のながきかひもあらめ。是まではいそがれつれ共、いまより後はいそぐべし共おぼえず。	巻三
平家物語	前関白松殿の侍に江大夫判官遠成といふものあり。是も平家心よからざりければ、既に六波羅より押寄て擲取らるべしと聞えし間、子息江左衛門尉家成打具して、いづち共なく落行けるが、稲荷山にうちあがり、馬より下て、親子いひ合せけるは、「東國の方へ落くだり、伊豆國の流罪人、前兵衛佐頼朝をたのまばやと思へ共、それも當時は勅勘の人で、身ひとつだにもかなひがたうおはず也。日本國に、平家の庄園ならぬ所やある。とてものがれざらむ物ゆへに、年来住なれたる所を人にみせむも恥がましかるべし。たゞ是よりかへつて六波羅よりめし使あらば、腹かき切て死なんにはしかじ」とて	巻三
平家物語	何事も限りある事で候へば、平家たのしみさかへて廿餘年、され共悪行法に過て、既に亡び候ならず。天照大神・正八幡宮いかでか捨まいらせ給べき。中にも君の御憑みある日吉山王七社、一乗守護の御ちかひあらたまらずは、彼法華八軸に立てかけてこそ、君をばまもりまいらせ給ふゝめ。しかれば、政務は君の御代となり、凶徒は水の泡ときえうせ候べし	巻三
平家物語	日來の契を變ぜず、一所にて死にてけるこそむざんなれ。	巻四
平家物語	斎藤別當あざわらて「まことには、をのゝの御心どもをかなびき奉らんとてこそ申たれ。そのうへ実盛は今度のいくさに討死せうと思ひきて候ぞ。二度都へまいるまじきよし人々に申をいたり。大臣殿へも此やうを申あげて候ぞ」といひければ、みな人此儀にぞ同じける。さればその約束をたがへじとや、當座にありし者共、一人も残らず北國にて皆死にけるこそむざんなれ。	巻七
平家物語	大将三位入道頼政父子、命かろんじ、義をおもんじて、一戦の功をはげますといへ共、多勢のせめをまぬかれず、形骸を古岸の苔にさらし、性命を長河の浪にながす。令旨の趣肝に銘じ、同類のかなしみ魂をけつ。是によって東國北國の源氏等をのゝ三洛を企て、平家をほろぼさんとほす。	巻七
平家物語	万死の命を忘て一戦の功をたつ。	巻七
平家物語	すでにたゝんとし給へば、袖にすがて、「都には父もなし、母もなし。捨られまいらせて後、又誰にかはみゆべきに、いかならん人にも見えよなど承はるこそうらめしけれ。前世の契ありければ、人こそ憐み給ふ共、又人ごとにしもや情をかくべき。いづくまでもともなひ奉り、同じ野原の露ともきえ、ひとつ底のみくづもともならんとこそ契しに、さればさ夜のね覚のむつごとは、皆偽になりにけり。せめては身ひとつならばいかゞせん、おさなき者共をば、誰にみゆづり、いかにせよとかおぼしめす。うらめしうもとでめ給ふ物哉」と	巻七
平家物語	三位中將の給ひけるは、「誠に人は十三、われは十五より見そめ奉り、火のなか水の底へもともにいり、ともにしづみ、限ある別路までも、をくれ先だゝじとこそ申しか共、かく心うきありさまにていくさの陣へおもむけば、具足し奉り、ゆくゑもしらぬ旅の空にてうき目をみせ奉らんもうたてかるべし。其上今度は用意も候はず。いづくの浦にも心やすう落ついたらば、それよりしてこそむかへに人をもたてまつらめ」とて、おもひきてぞたゝれける	巻七
平家物語	薩摩守悦て、「今は西海の浪の底にしづまば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ、浮世におもひをく事候はず。さらばいとま申て」とて、馬にうちのり甲の緒をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。	巻七
平家物語	かひなき命をいきて、今はかゝるうき目にあひ候。死期の時は必ず一沸土へむかへさせ給へ	巻七

表2 (つづき)

史料名	「死」に関する記述	巻数
平家物語	源蔵人の家の子に、信濃次郎蔵人仲頼といふ者あり。敵にをしへだてられて、蔵人のゆくゑをしらず、栗毛なる馬のしたおしろいはしりいでたるを見て、下人をよび、「こゝなる馬は源蔵人の馬とこそみれ。はやうたれけるにこそ。死なば一所で死なんとこそ契しに、所々でうたれむことこそかなしけれ。どの勢の中へかいると見つる	巻八
平家物語	木曾涙をながいて、「かゝるべしとだ知りたりせば、今井を勢田へはやらざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契しに、ところゞでうたれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑをきかばや」とて、河原のぼりにかくるほどに、六条河原と三条河原の間に、敵おそてかゝればとてかへしとてかへし、わづかなる小勢にて、雲霞の如なる敵の大勢を、五六までぞおかへす。	巻九
平家物語	「さてはよい敵ござんなれ。おなじう死なば、よかろう敵にかけあふて、大勢の中でこそ打死をもせめ」とて、まさきにこそすゝみけれ。	巻九
平家物語	義仲宮こにていかにもなるべかりつるが、これまでのがれくるは、汝と一所で死なんとおもふため也。ところゞでうたれんよりも、ひととこでこそ死をもせめ	巻九
平家物語	今井四郎いくさしけるが、是をきゝ、「いまはたれをかばはんとてかいくさをばすべき。是を見給へ、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本」とて、太刀のさきを口に含み、馬よりさかさまにとび落、つらぬかてぞうせにける。	巻九
平家物語	信濃國に候が、「あばれわが父はようてや死にたるらん、あしうてや死にたるらん」	巻九
平家物語	これはきこゆる悪所であなり。敵にあふてこそ死にたけれ、悪所におちては死たからず。あばれこの山の案内者やあるらん	巻九
平家物語	鎌倉殿に中たがうて、奥州でうたれ給ひし時、鷲尾三郎義久とて、一所で死にける兵物也。	巻九
平家物語	成田が「死なば一所で死なう」どちぎる	巻九
平家物語	梶原これを見つけて、「いまだうたれざりけり」と、いそぎ馬よりとんでおり、「景時こゝにあり。いかに源太、しぬるとも敵にうしろをみすな」とて、親子して五人のかたきを三人うとり、二人に手おほせ、「弓矢とりはかくるもひくも折にこそよれ、いざうれ、源太」とて、かい具してこそ出きたれ。梶原が二度のかけとは是也。	巻九
平家物語	三位中将もかよふ心なれば、「宮こにいかにおぼつかなくおもふらん。頸どものなかにはなくとも、水におぼれてもなしに、矢にあたってもうせぬらん。この世にある物とはよもおもはじ。露の命のいまだながらへたとしらせたてまつらばや」とて、侍一人したてて宮こへのぼせられけり。	巻十
平家物語	逢ことも露の命ももろともにこよひばかりやかぎりなるらん	巻十
平家物語	しかれば則亡父故太政大臣、保元・平治両度の合戦の時、勅命ををもうして、私の命をかりうす。ひとへに君の為にして、身のためにせず。就レ中彼頼朝は、去平治元年十二月、父左馬頭義朝が謀反にて、頻に誅罰せらるべきよし仰下さるといへども、故入道相國慈悲のあまり申なだめられしところ也。	巻十
平家物語	おしからぬ命なれどもけふまでぞつれなきかひのしらねをもみつ	巻十
平家物語	後夜晨朝の鐘の晨聲には、生死の眠をさますらんとも覺たり。	巻十
平家物語	生者必滅、曾者定離はうき世の習にて候也。末の露もとのしづくのためしあれば、たとひ遅速の不同はありとも、おくれさきだつ御別、つるになくてしもや候べき。	巻十
平家物語	君の御世にわたらせ給はんを見まいらせて、死に候はん事こそ口惜覚候へ。さ候はでは、弓矢とる物の敵の矢にあてしなん事、もとより期する處で候也。	巻十一
平家物語	就レ中に「源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひける物、讃岐國八嶋のいそにて、しうの御命にかはりたてまてうたれにけり」と、末代の物語に申されん事こそ、弓矢とる身は今生の面目、冥途の思出にて候へ」と申もあへず	巻十一

表2 (つづき)

史料名	「死」に関する記述	巻数
平家物語	一の谷ひへ鳥ごえをもこの馬にてぞおとされたりける。弟の四郎兵衛をはじめとして、是を見る兵ども皆涙をながし、「此君の御ために命をうしなはん事、またく露塵程もおしからず」とぞ申ける。	巻十一
平家物語	与一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現宇都宮、那須のゆぜん大明神、願くはあの扇のまなかるさせてたばせ給へ。是をみそんずる物ならば、弓きりおり自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して、目を見ひたれば、風もすこし吹よはり、扇もるよげにぞなたりける。	巻十一
平家物語	新中納言知盛卿舟の屋形にたちいで、大音聲をあげての給ひけるは、「いくさはけふぞかぎり、物ども、すこしもしりぞく心あるべからず・天竺・震旦にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、運命つきぬれば力及ばず。されども名こそおしけれ。東国の物共によはげ見ゆな。いつのために命をばおしむべき。是のみぞおもふ事」との給へば	巻十一
平家物語	主君の命をおもんじて、私の命をかるんず。こゝろさしの程、尤神妙なり。和僧いのちおしくは鎌倉へ返しつかはさんはいかに	巻十二
吾妻鏡	當時經廻の士の内、殊に以て御旨を重んじ、身命を軽んずるの勇士等各一人を、次第に閑所に召し拔んで、合戦の間の事を議せしめ給ふ	巻一
吾妻鏡	其後黄瀬川宿に到り留まりて逍遙す、然れども残り留まる所の壯士等、死を争ひて挑戦す	巻一
吾妻鏡	而して源家の従兵を計るに、彼の大軍に比し難しと雖も、皆舊好を重ずるに依り、只死を致さんことを乞ふ	巻一
吾妻鏡	又御許容の気有り、實平重ねて申して云ふ、今の別離は後の大幸なり、公私命を全うして計を外に廻らさば、盍ぞ会稽の恥を雪がざらんやと云々	巻一
吾妻鏡	義明云ふ、吾源家累代の家人として、幸に其貴種再興の秋に逢ふなり、盍ぞ之を喜ばざらんや、保つ所は已に八旬有餘なり、餘算を計るに幾ばくならず、今老命を武衛に投ちて、子孫の勳功に募らんと欲す、汝等急ぎ退去して、彼の存亡を尋ね奉る可し、吾獨り城郭に残留まりて、多軍の勢に模し、重頼に見しめんと云々	巻一
吾妻鏡	父義隆は、去る平治元年十二月、天台山龍華越に於て、故左典廐の奉為に命を棄つ	巻一
吾妻鏡	一日、己卯、左兵衛督平知盛卿、数千の官兵を率ゐて、近江國に下向し、源氏山本前兵衛尉義経、同弟柏木冠者義兼等と合戦す、義経已下身を棄て命を忘れて挑戦すと雖も、知盛卿多勢の計を以て火を放ち、彼等の館並びに郎従の宅を焼廻るの間、義経、義兼度を失ひて逃亡す	巻一
吾妻鏡	今義廣の謀計を聞きて、忠を思ひ、命を軽んずるの故、戦場に臨みて勝に乗ずるを得たり矣	巻二
吾妻鏡	此呵責に依て、佳僧等各庵室の樞を閉ちて、供養の法器を捨て畢んぬ、寺中耕作の田畠無く、唯露命を林葉に懸くる許なり	巻二
吾妻鏡	其後又院宣と稱して、源氏等西海に下向し、度々合戦を企つ、此條已に賊徒の襲来に依り、上下の身命を存へんが為、一旦相禦ぎ候ふ計なり、全く公家の發心に非ざるは、敢て其隠無きなり	巻三
吾妻鏡	去る治承四年、関東に馳せ参じて以来、偏に忠を存ずるの處、去年廣常誅戮の後、恐怖を成して邊土に半面す、而るに今廣常、罪無くして死を賜はる、潛かに御後悔有るの間、彼の親戚等多く以て免許せらる	巻三
吾妻鏡	兼信の如きは、只戦場に向ひて命を棄つ可き一段なり、其れ猶以て定む可からず	巻三
吾妻鏡	行平云ふ、身命に於ては本より之を惜しとせず、然れば甲冑を著せずと雖も、自身進退の船に乗り、先登意に任せんと欲すと云々	巻四
吾妻鏡	泰經兵法を知らずと雖も、推量の覃ぶ所、大將軍たる者は、未だ必ずしも一陣を競はざるか、先づ次將を遣はさる可きや者、廷尉云ふ、殊に存念有り、一陣に於て命を棄てんと欲すと云々	巻四

表2 (つづき)

史料名	「死」に関する記述	巻数
吾妻鏡	凡そ君の奉為に戦場に臨みて、萬死の数に入る今に於ては亦病に侵され、殆ど死を免れ難きか、再び合眼せずば、老老毛の存命甚だ據る所無しと云々	巻四
吾妻鏡	縦ひ命を墜すと雖も、國敵の為に討たるの由、思食さる可く候かの趣、披露す可し者	巻四
吾妻鏡	平家一族追討の為、上洛せしむるの手合に、木曾義仲を誅殺するの後、平氏を責め傾けんが為、或時は峨々たる巖石に駿馬を策ち、敵の為に命を亡ぼすを顧みず、或時は漫々たる大海に、風波の難を凌ぎ、身を海底に沈め骸を鯨鮪鮓の鯨に懸くるも痛まず、加之、甲冑を枕と為し、弓箭を業と為す、本意併しながら亡魂の憤を休め奉り、年来の宿望を遂げんと欲するの外他事無し	巻四
吾妻鏡	仰せて云ふ、平氏追討の間、一谷已下の戦場に於て、父子相並びて命を棄てんと欲すること、度々に及ぶの故なりと之々、政光頗る笑ひて、君の為に命を棄つるの條、勇士の志す所なり	巻九
吾妻鏡	佐藤庄司等死を争ひて挑み戦ふ為重資綱、為家等疵を被る	巻九
吾妻鏡	三日、庚申、泰衡数千の軍兵に囲まれ、一旦の命害を通れんが為、隠ること鼠の如く退くこと鼠に似たり	巻九
吾妻鏡	十一日癸亥、土左國の佳人夜須七郎行宗、本領を安堵す可きの旨、御下文を賜はる、是土左冠者討取られ給ふの時、身命を惜まず、怨敵蓮池権守を討取りてより以降、度々勳功有りと云々	巻十
吾妻鏡	此條冥慮に通ずるに似たりと雖も頗る主命に背かしむる者か、凡そ武略の家に生れ、弓箭に携はるの習、身を殺すを痛まず、偏に死に至るを思ふは、勇士の執る所なり	巻十二
吾妻鏡	先規此の如し、今一身の述懐を以て、強ち重科に處せられ難からんかと云々	巻十六
吾妻鏡	謂ゆる勳功は、関東草創の寂初に、大夫尉兼隆を誅せしめ給ふの時、經蓮兄弟四人、討手の人数に列りしより以降、世靜謐に属するの今に至るまで、度々身を忘れ、命を棄てて敵陣を破ると云々	巻十七
吾妻鏡	朝盛も同じく夙夜の長番を抛ちて蟄居せしめ、其暇の際を以て、淨遍僧都に逢ひ、出離生死の要道を学びて、讀經念佛の勤修未だ怠ること有らず、漸く發心を催し、今夕已に素懐を遂げんと欲す	巻二十一
吾妻鏡	其中、高井三郎兵衛尉重茂義秀と攻戦し、互に弓を棄て、轡を並べ雌雄を決せんと欲して、兩人取合ひ共に以て馬より落つ、遂に重茂討たれ訖んぬ、義秀を取り落すの者は此一人たるの上、一族の謀曲に興せず、獨り御所に参じて命を損すなり、人以て感歎せざる莫し、爰に義秀未だ馬に騎らざるの際、相模次郎朝時、太刀を取りて義秀と戦ふ、其勢を比ぶれば、更に對揚を恥づと雖も、朝時主逢ひて疵を蒙るなり、然れども其命を全うす	巻二十一
吾妻鏡	凡そ義盛畜に大威を攝するのみに匪ず、其士率一以て千に當り、天地震怒して相戦ふ、今日の暮より終夜に及び、星を見るも未だ已まず、匠作全く彼の武勇を怖畏せず、且は身命を棄て、且は健士を勤めて調禦するの間曉更に臨みて義盛漸く兵盡き箭窮まり	巻二十一
吾妻鏡	禁制せらるるの處所司法師等僅かに相逢ひて、更に承伏の詞無し、廳宮猶衆徒に逢ひて綸言を傳ふ可きの由示し含むるの間、悪僧等出來り、妄りに奇恠の詞を吐き、曾て身命を惜しむ可からず、綸言を承るに及ばざる由呵訕し、殆んど放言に及ぶ	巻二十一
吾妻鏡	名を惜しむの族は、早く秀康、胤義等を討取り三代將軍の遺跡を全うす可し但し院中に参らんと欲する者は、只今申切る可し者、群參の士悉く命に応じ且は涙に溺れて返報を申すこと委しからず、只今を輕んじて恩に酬いんことを思ふ	巻二十五
吾妻鏡	兼義、貞幸の乗馬、河中に於て各矢に中り水に漂ふ貞幸水底に汎み、已に命を終へんと欲す、心中に諏方明神を祈念し、腰刀を取りて、甲の上帯小具足を切り良久しうして、僅かに浅瀬に浮び出で、水練の郎從等の為に救はれ訖んぬ	巻二十五
吾妻鏡	昨日梟首せらるるの間、主君の遺骨を拾ひて歸洛するの由答ふ、浮生の悲、他の上に非ず、彌魂を消す死罪を遁る可からざる事は、兼ねて以て存中に挿むと雖も、若し虎口を出でて、龜毛の命有らんかの由猶殆待するの處、同過の人已に定まり訖んぬるの間、只亡ざるが如し	巻二十五

特徴として、東国武士の勇猛さと「死」を飾ろうとするさまがあるように記述されている。

以上のことから、貴族的武士は「死」までも華麗で美しくあろうし、「死」を静かに受け入れようとするのに対し、東国武士はだれもが避けようとする「死」に対しても潔く且つ勇猛に死にきることによって「死」を飾ろうとするところに貴族的武士と東国武士との死生観の違いがみられる。

6. 「坂東武者ノ習」の死生観 — 『太平記』を中心に—

本章では、源平争乱を経て東国武士の武士道が主流になってからの南北朝期から室町期にみられる武士の思想の死生観について触れる。

この時代の武士の死生観を理解するうえで『太平記』を史料として挙げるができる。

この史料から読み取れる「死」に関する記述を抽出すると以下の表3のようになる。(表3)

以上の記述から考察すると、平家に代表される貴族的な武士の思想は希薄になり、至って勇猛な戦闘者としての荒々しい武士の一面が強調された思想が中心になっているのが理解できる。また、この時期の武士の思想は、「兵ノ道」という武士の思想にみられた戦闘者としての思想に特出するのではなく、「ご恩」と「奉公」といった鎌倉幕府が構築した武士社会の関係に代表されるような一族としての武士団組織内の結びつきから、個人の名誉や先祖の名誉だけでなく、一族の未来の為にどのような「死」を遂げるか或は「死」を飾るかといった、これまでにはみられなかった「死」への観念がみてとれる。これは以下に記す記述からも理解できる。

輕_レ死重_レ名者ヲコソ人トハ申セ。誰々モ爰ニテ討死シテ、名ヲ子孫ニ残サント被_レ思定_レ候へ^{xxiii}。

命ヲ惜ムモ子ノ為也。汝一國ノ主ト成テ榮花ヲ子孫ニ及サバ、我命全ク不_レ可_レ惜。早ク其弓ヲ引其矢ヲ放テ我ヲ射殺シ、報國ノ賞ニ預_レ^{xxiv}。

以上に述べた内容に関して、古川氏は「王朝憧憬の思想のほう主流であった『平家物語』とは反対に、『太平記』では坂東武者の習いのほうが主流のようにおもわれる」^{xxv}と指摘している。氏の指摘からも理解できるように、平治の乱の後に栄華を極めた平家の没落と同時に「貴族的武士道」が衰退し、武士社会全体を率いるリーダーが平家から源氏へと変わり、この源氏を中心とした東国武士にみられる「東国武士道」が武士社会全体から注目されることとなる。以降「東国武士道」が武士全体の思想の主流として深く浸透していったと考えられる。

しかし、ここでの注意点は、この時期の武士は常に生と死の狭間に身を置き、常に「死」を覚悟した生き方を求められており、武士全体の思想の主流が「貴族的」なものから殺伐とした荒々しい「東国的」なものへと変化したとはいえ、武士としての存在には変わりなく、ただ「死」の捉え方や「死」の遂げ方といった部分に違いがみられることである。

7. おわりに

各章ごとに述べた内容を簡潔にまとめると、先ず『今昔物語』『保元物語』『平治物語』といった史料から読み取れる「兵ノ道」にみられる死生観は、至って原始的な戦闘者としての性格が色濃くみられ、勇猛な死に様や死の受け入れ方が特徴として挙げられる。

次に、『平家物語』『吾妻鏡』といった史料から読み取れる「貴族的武士道」と「東国武士道」にみられる死生観は、「死」への覚悟という観点では同様である。しかし、その表現の仕方には「貴族的武士道」は「静」或は「雅」といった情景が窺えるのに対し、「東国武士道」は「勇猛」といった情景が窺える点に違いがみられる。このことから貴族的武士は「死」までも華麗で美しくあろうとするのに対し、東国武士はだれもが避けようとする「死」に対しても潔く且つ勇猛に死にきることに貴族的武士と東国武士との死生観の違いがみられる。

次に『太平記』から読み取れる「坂東武者ノ習」にみられる死生観は、平家に代表される貴族的な武

表3

史料名	「死」に関する記述	巻数
太平記	サレバヨ、我不慮ノ勅命ヲ蒙テ、君ニ憑レ奉ル間、辞スルニ道無シテ、御謀反ニ興シヌル間、千ニ一モ命ノ生ンズル事難シ。無レ端存ル程ニ、近ツク別ノ悲サニ、兼加様ニ申也。此事穴賢人ニ知サセ給フナ。	巻一
太平記	土岐十郎久ク戦テハ、中々生捕レントヤ思ケン、本ノ寢所ヘ走帰テ、腹十文字ニカキ切テ、北枕ニココ臥タリケレ。中間ニ寝タリケル若黨ドモ、思々ニ討死シテ遁ル、者一人モ無リケリ。	巻一
太平記	今一筋胡籙ニ残タル矢ヲ抜テ、胡籙ヲバ櫓ノ下ヘカラリト投落シ、「此矢一ヲバ冥途ノ旅ノ用心ニ持ベシ。」ト云テ腰ニサシ、「日本一ノ剛者、謀叛ニ興シ百害スル有様見置テスニ語レ。」ト高声ニ呼テ、太刀ノ鋒ヲ口ニ呀テ、櫓ヨリ倒ニ飛落テ、貫テコソ死ニケレ。	巻一
太平記	鎌倉マデモ下シ着ケズ、道ニテ失ヒ奉レベシナンド聞ヘシカバ、彼ノ宿ニ着テモ今ヤ限リ、此ノ山ニ休メバ是ヤ限リト、露ノ命ノアル程モ、心ハ先ニ消ツベシ。	巻二
太平記	武士ノ家ニ生タル故ニヤ、父ガ討レケルヲ見テ、同ク戦場ニ打死シテ名ヲ残ケルコソ哀ナレ。	巻二
太平記	主ノ死骸ヲ枕ニシテ討死セント相争フ。	巻二
太平記	名ヲ惜ミ命ヲ輕ンズル若黨共、歸合々々所々ニテ討死シケル其間ニ、萬死ヲ出テ一生ニ合ヒ、百晝ニ京ヘ引歸ス。	巻二
太平記	御邊達如何ガ思ゾヤ、此間数日ノ合戦ニ、石ニ被レ打、遠矢ニ當テ死ヌル者、幾チ萬ト云数ヲ不レ知。是皆差テ為出シタル事モ無テ死ヌレバ、骸骨未ダ乾カザルニ、名ハ先立テ消去ヌ。同ク死ヌル命ヲ、人目ニ餘ル程ノ軍一度シテ死タラバ、名誉ハ千載ニ留テ、恩賞ハ子孫ノ家ニ榮ン。侖平家ノ乱ヨリ以来、大剛ノ者トテ名ヲ古今ニ揚タル者共ヲ案ズルニ、何レモ其程ノ高名トハ不レ覺。	巻三
太平記	皆是ヲ見テ、「アナ哀ヤ、正成ハヤ自害ヲシテケリ。敵ナガラモ弓矢取テ尋常ニ死タル者哉。」ト誉ヌ人コソ無リケレ。	巻三
太平記	武家ハ弥所レ恐ナルベシ。「死セル孔明生ル仲達ヲ走ラシム」ト云事アリ。サレバ死シテ後マデモ、威ヲ天下ニ残スヲ以テ良將トセリ。	巻五
太平記	先思案スルニ、先度ノ軍ニ大勢打負テ引退ク跡ヘ、宇都宮一人小勢ニテ相向フ志、一人モ生テ歸ラント思者ヨモ候ハジ。其上宇都宮ハ坂東一ノ弓矢取也。	巻六
太平記	今日ヨリ後差タル思出モナキ身ノ、ソバロニ長生シテ武運ノ傾カンヲ見ンモ、老後ノ恨臨終ノ障共成ヌベケレバ、明日ノ合戦ニ先懸シテ、一番ニ討死シテ、其名ヲ末代ニ遺サント存ズル也。	巻六
太平記	我等忝モ十善ノ君ニ被レ憑進テ、尸ヲ軍門ニ曝ス共名ヲ後代ニ残ン事、生前ノ思出、死後ノ名誉タルベシ。	巻七
太平記	舎弟脇屋次郎義助暫思案シテ、進出テ被レ申ケルハ、「弓矢ノ道、死ヲ輕ジテ名ヲ重ズルヲ以テ義トセリ。(以下略)」	巻十
太平記	「弓矢ノ家ニ生レタル者ハ名ヲコソ惜メ、命ヲバ惜マス者ヲ。云處虚事カ、戦テ手並ノ程ヲ見給ヘ。」	巻十四
太平記	彼死生ヲ見ズバ、片時ノ命生テモ何かハズベキ。勇士ノ戦場ニ命ヲ捨ル事只是子孫ノ後榮ヲ思フ故也。サレバ末幼ナキ身ナレドモ、片時ノ別ヲ悲ンデ此戦場ニモ伴ヒツル也。其死生ヲ知ラデハ、如何サテ有ベキ。	巻十四
太平記	「苟モ存テ義無ンヨリハ、死シテ名ヲ残サンニハ不レ如。」	巻十六
太平記	輕レ死重レ名者ヲコソ人トハ申セ。誰々モ爰ニテ討死シテ、名ヲ子孫ニ残サント被ニ思定一候ヘ。	巻十六
太平記	一宮ヲ始進セテ、城中人々不レ残自害スル處ニ、我一人逃テ命ヲ活タラバ、諸人ノ物笑ナルベシト思ケル	巻十八
太平記	命ヲ惜ムモノノ為也。汝一國ノ主ト成テ榮花ヲ子孫ニ及サバ、我命全ク不レ可レ惜。早ク其弓ヲ引其矢ヲ放テ我ヲ射殺シ、報國ノ賞ニ預レ。	巻三十二
太平記	古ヨリ今ニ至マデ、武士ノ家ニ生ル、人、名ヲ惜テ命ヲ不レ惜、皆是妻子ニ名残ヲ慕ヒ父母ニ別ヲ悲ムトイヘ共、家ヲ思ヒ嘲ヲ恥ル故ニ惜カルベキ命ヲ捨ル者也。	巻三十三
太平記	サレバ今度合戦ニ相構テ身命ヲ輕ジテ先祖ノ名ヲ不レ可レ失。	巻三十三

士の思想は希薄になり、至って勇猛な戦闘者としての荒々しい武士の一面が強調された思想が中心になっているのが理解できる。しかし、この時期の武士の思想には、個人の名誉や先祖の名誉だけでなく、一族の未来の為にどのように「死」を遂げるかといった、これまでにはみられなかった「死」への観念もみてとれる。

以上をふまえていえることは、中世期の武士は近世江戸期の武士にみられるようになる儒教によって裏打ちされた高度な精神的・倫理的な心情は希薄で、至って原始的な戦闘者としての色が濃いことである。また、死生観としては「生」よりも「死」を重視し、「死」を受け入れる覚悟や潔く死にきる覚悟といった観念が中世期の武士全般において共通してみられるといえよう。

しかし、「死」に対する覚悟とは別にその表現の仕方に、中世期の武士の中で貴族的武士と東国武士とでは多少異なる。また源氏の台頭と鎌倉時代にかけては東国武士道の死生観が中心となって発展していく。ここに中世武士道の死生観における特徴があり、武士道思想全体における「武士道論」と「土道論」いった大きな枠組みの中の「武士道論」における死生観の変遷がみてとれる。一方の「土道論」という思想的枠組みは、中世期の武士の思想にはみら

れない。これは「土道論」の思想的バックボーンは「儒教」であり、この「土道論」が成熟するのは近世以降になるからである。中世期の武士における「武士道論」の思想的バックボーンは、「神道」と「仏教」の混合した神仏習合という日本独特の思想が中心であったことが起因していると考えられる。以上の事柄をふまえて、中世期の武士の思想の変遷をまとめると以下の図1のようになる。

以上に述べた中世期における武士道思想の変遷をふまえた上で、さらに時代を広範囲にし、取り扱う史料の選定を重ね、中世から近世における武士道思想全体の変遷を考察していくことは今後の課題とする。(図2)

また、本研究で取り扱った主な参考文献は以下の通りである。

〈主な参考文献〉

- 相良亨『武士の思想』ペリかん社、1984.
- 相良亨『武士の倫理 近世から近代へ』相良亨著作集3, ペリかん社、1993.
- 相良亨『死生観 国学』相良亨著作集4, ペリかん社、1994.
- 和辻哲郎『和辻哲郎全集』第十二巻, 岩波書店、1962.
- 酒井利信『日本精神史としての刀剣観』第一書房,

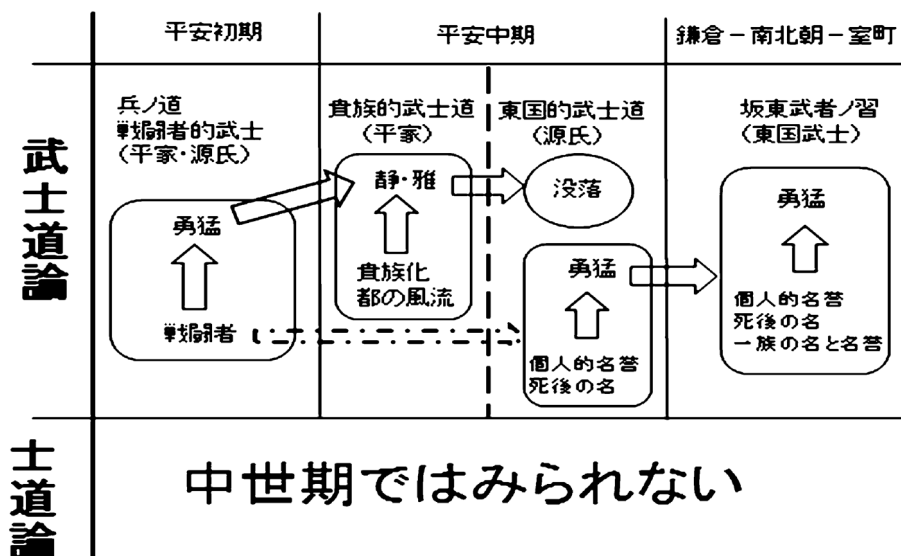


図2 中世武士道の死生観における特徴と変遷

- 2005.
- 菅野覚明『よみがえる武士道』PHP 研究所, 2003.
- 古川哲史『日本的求道心』理想社, 1987.
- 古川哲史『武士道の思想とその周辺』福村書店, 1957.
- 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会, 1999.
- 小澤富夫『歴史としての武士道』ぺりかん社, 2005.
- 前林清和『武道における身体と心』財団法人日本武道館, 2007.
- i 新村 出『広辞苑』第五版, 岩波書店, p. 11, 1998.
- ii 日本国語大辞典 第二版 編集委員会 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版 第十一巻』小学館, p. 836, 2001.
- iii 小澤富夫『歴史としての武士道』ぺりかん社, p. 2, 2005.
- iv 本論における「武士道論」の定義として, 神仏習合の思想が背景としてあり, 常に死生の間で生き, 「死」を覚悟し尚且つ「死」を問題視しない姿勢をとる武士の思想を「武士道論」と位置づける.
- v 本論における「土道論」の定義として, 儒教の思想が背景としてあり, 理論的色彩が非常に濃く, 日常において「死」を覚悟はするが求められているのは為政者としての高い道徳性と人倫を生きる姿勢である. この姿勢を求める武士の思想を「土道論」と位置づける.
- vi 木村茂光『中世社会の成り立ち』日本中世の歴史 1, 吉川弘文館, p. 11, 2009.
- vii 福島正樹『院政と武士の登場』日本中世の歴史 2, 吉川弘文館, p99, 2009.
- viii 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会, 1999.
- ix 『愚管抄』巻第四, 日本古典文学大系86, 岩波書店, p. 206, 1967.
- x 関 幸彦・野口 実編『吾妻鏡必携』吉川弘文館, pp1~8, 2008.
- xi 八代国治『吾妻鏡の研究』明世堂書店, 1913.
- xii 後藤丹治・釜田喜三郎『太平記』(一・二・三), 日本古典文学大系34, 岩波書店, 1960.
- xiii 安井久善『太平記要覧』おうふう(株), 1997.
- xiv 高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一晴彦『平家物語』(上), 日本古典文学大系32, 岩波書店, p. 83, 1959.
- xv 後藤丹治・釜田喜三郎『太平記』(一) 日本古典文学大系34, 岩波書店, p34, 1960.
- xvi 永積安明『太平記』『『太平記』の思想』, 岩波書店, p. 200, 1984.
- xvii 永積安明『太平記』『『太平記』の思想』, 岩波書店, 1984.
- xviii 安井久善『太平記要覧』おうふう, 1997.
- xix 市沢 哲『太平記を読む』吉川弘文館, 2008.
安井久善『太平記要覧』おうふう, 1997.
- xx 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』東京大学出版会, p. 15, 1999.
- xxi 小澤富夫『歴史としての武士道』ぺりかん社, p. 37, 2005.
- xxii 『平家物語』下, 日本古典文学大系32, 岩波書店, 1959.
- xxiii 『太平記』二巻, 日本古典文学大系35, 岩波書店, p. 143, 1961.
- xxiv 『太平記』三巻, 日本古典文学大系35, 岩波書店, pp. 219~220, 1961.
- xxv 古川哲史『日本的求道心』理想社, p. 91, 1987.

(平成24年1月10日 受付)
(平成24年4月2日 受理)